

## 前回までのあらすじ

やみひめという動力を失い、代わりとして『骨』を思わせるテイラノサウルス型機獣を捕食した（ルイン）は、サクヤヒメの支配コントロールを離れ、独断で活動を続けていた。やみひめはツバキとアヤカの支援を受けながら、（ルイン）の中で眠っているハイデマリーの救出を試みるが叶わず、オオミヤ・シティの被害もまた拡大していく。

その様子をモニター越しに見守っていたロゼットは、残留している市民に対して避難命令を発し、シェルターへの退避を呼びかける。

だがそれでは状況の根本的な解決には至らない。そこへ姿を現したのは、かつてキリエと共に消息不明となった（エグゼキューター）のタオエンとベアトリーチエーファフロウ姉妹だった。二人は難を逃れるため一時的に惑星ゼヘナを離れ、旅の目的である姉との合流を果たし、このタイミングで帰還したという。

同じ頃、避難命令によって動きが慌ただしくなっていたゼンジン病院に、紅桜べんざくらが搭乗するオオカミ型の機獣（ヤミヒメ）が現れる。それを巡ってカナコと紅桜が衝突するが、ある種の情報を『受信』したアサトは、洪々ながら再び（ヤミヒメ）に乗り込む決意をする。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

虚空に青白く光る曲線が走り、円を描く。円は広がり、人間が楽に通れる大きさになると、内側に周囲とは別の景色を映し出す。事情を知らない者が見れば、直径三メートルの円形モニターが脈絡なく置かれていると思うだろう。

「だがそれはモニターの類ではなく——『門』だった。」

「——よっと」

円の内側から少女が現れた。十二、三歳ぐらいの、中学に上がったかどうかといった年齢に見える。茶色のショートヘアに、黄玉のような黄色の瞳。子猫を思わせる、まだ幼さが多分に残る可愛らしい容姿である。

彼女の名前はベアトリーチェ・ファフロウという。

「戻ってこれたみたいだけど……」

ベアトリーチェが数歩進み、辺りを見回す。

「随分と様子が変わっていますね」

困惑するベアトリーチェと違い、淡々とした口調と表情でそう答えたのは、彼女に続いて現れた少女だった。

こちらは高校生くらいに見えるが、年齢に似つかわしくない落ち着き払った雰囲気がある。緩く波打つセミロングの銀髪。神秘的な金色の瞳。口元の艶黒子など、ミステリアスな印象が強い。

タオエン・ファフロウ。

ファミリーネームが示す通り、ベアトリーチェの姉に当たる。

「タオ姉、ひよっとして時間間違っただんじやない？」

「並行世界を移動しているだけで、時間移動は出来ませんよ。私達がゼヘナを離れていた数日間に、街がこんな有様になるような出来事があったのでしょ」

ベアトリーチェとタオエンは、古代種（スティングガー）の封印施設の調査に向かった際、崩れた足場から落下し、咄嗟に並行世界を渡る事で難を逃れていた。

「例の古代種ってというのがやったのかな……」

瓦礫が散乱し、人の気配もない今のオオミヤ・シティに、かつてのような活気は見受けられない。

「どうでしょう。話を聞く限り、古代種というのはかなりの大きさだそうですが、それにしては破壊が小規模です。『ブレイクス』の死骸が散見されますし、原因はそれかもしれません」

タオエンの言う通り、巨大な何かが暴れたというより、〈機獣少女〉と〈ブレイクス〉の大規模な戦闘があったと考える方が自然だ。あくまで目に見える範囲での話だが。

「——此処が〈アニヒレイター〉の世界か」

ベアトリーチェとタオエンの会話を他所に、『門』を通じて現れた三人目の少女が言った。タオエンと同じ高校生くらいの年齢だが、静謐な雰囲気の彼女とは別種の、凜とした空気を纏っている。長く艶やかな黒髪は赤いリボンで一本に結ばれ、琥珀のような橙色の瞳は鋭い。

フアフロウ三姉妹の長女——ヤミヒメ・フアフロウである。

とある理由で故郷を飛び出した彼女を追い、ベアトリーチェとタオエンは旅をしていた。ちなみに三人とも同じ黒の外套と鏢の広いとんがり帽子を纏い、多少の差異はあれど共通の意匠でデザインされた服装に身を包んでいるため、魔女が集まっているように見える。

「ふむ。だいたい判った」

周辺をざっと見渡したただだが、それだけですべてを理解したかのような口ぶりでヤミヒメは言った。

「……ねえ、タオ姉」

「はい」

「ヤミ姉、よくまあ言ってるけど、本当に判ってるの?」

「それを聞くのは野暮というものですよ。何も言わず生暖かく見守るのが妹の役目というものです」

小声で話しかけるベアトリーチェに、無表情だったタオエンが優しい笑みを浮かべる。

『察しろ』、あるいは『空気を読め』という事か。

「そんな事より、気になるのはこの現象です。あの時と同じく、世界が紅く染まっている。ヤミヒメを追う旅の途中で、二人が地球に立ち寄った時の話だ。その際も今と同じように、視界にそういうフィルターがかかったように周辺一帯が紅色に染まっていた。

その後、二人は現地で知り合ったツバキ・タカチホを惑星ゼヘナに送り、そのまま滞在していた。その折に前述のトラブルに遭い、いくつかの並行世界を巡っているうちにヤミヒメと合流し、こうしてまたゼヘナに戻ってきたのだった。

「この現象のおかげでゼヘナに戻ってこれたって言いたいの?」

当初は直接ゼヘナに繋がる『門』を開こうとしたが叶わず、いくつかの世界を経由しても上手くいかなかった。にも関わらず、二人が姉を見つけ、行動を共にする事を彼女が了承した直後、ゼヘナに繋がる『門』を開く事に成功した。

「そもそもこの現象に引き寄せられた結果、私の『門』が先の地球に繋がったのかもしれない」

「やっぱり、やみ子ちゃんが原因……?」

「無関係だと思っただけ、私は能天気ではありませんよ。この世界に要らぬ影響を与えないため、姉さんには素顔を隠していただきましょう」

そう言っただけ、タオエンはマントの内側からお面を取り出す。祭りの屋台で売っているような安価な、しかも何かのキヤラクターものである。

「……ヤミ姉、付けてくれるかな」

「むしろ喜んでくれます」

姉の選択を訝しむベアトリーチェに対し、タオエンは自信満々の表情で答えた。

「——おい」

「ひゃっ!?」

背後から聞こえたドスの利いた声に、思わずベアトリーチェは身を竦めた。

違う、選んだのは自分じゃなくて姉なのだ。そう心の中で言い訳をするが声にならない。

こう見えてベアトリーチェの戦闘力は並ではないのだが、そんな彼女が怯えるヤミヒメの力は推して知るべしだろう。

「姉さん、可愛い妹を無暗に威圧しないでください。可愛い妹を」

「そんなつもりは……なぜ二回言った?」

反射的に抱き着いてきたベアトリーチェを優しく抱きしめつつ、タオエンはやんわりとヤミヒメを窘める。恐らく『可愛い妹』には自分も含まれているのだろう。

「よしよし。怖い姉さんですね。——それで、何を言おうとしたんですか、可愛い妹を威圧する怖い姉さん」

「ぬう……」

露骨な嫌味を言うタオエンだが、ヤミヒメは自分に非があるためか怒るに怒れないといった様子だ。長女と末っ子の間には微妙な溝のようなものがあるようだが、次女とはその限りではないらしい。むしろ姉妹間のパワーバランスでは逆転しているのかもしれない。

「お前達の言っていた古代種とかいうのは、あれではないのか?」

舌戦では不利と悟ったヤミヒメがおとなしく話を進めた。彼女が顎をくいつと動かし、その指し示す先にタオエンが視線を向けると、その遙か先に想像していたより何倍も巨大な移動物体があった——いや、いた。

「……………?」

その圧倒的な存在に、さすがのタオエンも無表情ではいらなかった。周囲のビル群に比べれば小さいが、全高は五十メートル以上あるだろう。

ただ存在するだけで見る者に『畏れ』を感じさせる。

圧倒的で禍々しい。

それは（ルイン）、あるいは（ハメツノマジユウ）と呼ばれる機獣で、彼女等の言う古代種（ステインガー）とは別物なのだが、今は知る由もない。

「……戦ってるの、やみ子ちゃん達じゃない？」

「え……？」

思わず絶句してしまっていたタオエンが、ベアトリーチェの声ではっと我に返った。確かに、圧倒的に巨大で禍々しい存在と戦っている、（機獣少女）らしき人影が見える。二人はすでに名前が拳がついている流遠やみひめとツバキ・タカチホだが、もう一人は見覚えがない。修道女のような格好だが、（機獣少女）であるならMBジャケットなのだろう。

「知り合いならば加勢するか？」

タオエンの方は向かず、ヤミヒメの視線は戦闘に釘付けた。もし単独でこの場に居合わせていたなら、疾づくに飛び出していただろう。乱入したくてもうずうずしているのが表情から伝わってくる。

「……いえ。まずは状況を把握するべきだと思います」

一刻も早く助太刀に入らなければならない危機的状况には見えない。ならば優先すべきは、正確な現状把握であるとタオエンは判断した。

「じゃあ、ロゼットのところ？」

ロゼット・コダール。

稀代の技術者であり、ベアトリーチェとタオエンとも縁のある人物だ。

「ですね。無事だといいいのですが」

洪るヤミヒメを宥め、二人はロゼットがいるであろう（L.C.ファクトリー）に向かった。

その後、建物は半壊していたが、指揮所のような様相を呈していた地下施設にて、彼女等はロゼット・コダールと再会を果たす。

そして古代種の封印が破られていた事や、その古代種（ステインガー）が人の姿へと進化し（サクヤヒメ）と名乗った事、別の古代種である（ルイン）によってオオミヤ・シテイが蹂躪された事など、ベアトリーチェとタオエンが不在の間の出来事を知るのだった。

第四十五話

終わる世界

オオミヤ・シティの上空を飛行する二人の〈機獣少女〉。

ヴィオレ・モンターニュとロゼ・レオーネだ。

全高約六十メートルの超巨大機獣〈ルイン〉に対し、希少金属リーオで作られた三本の刃を撃ち出す発射装置——通称〈嵐の刃〉による空からの奇襲に失敗した二人は、一時空域を離脱していたところにロゼット・ユダールからの要請を受けた。彼女が言うには、世界中に発生していた〈ブレケース〉が東方大陸に集結しつつあり、その接近状況を知らせてほしいのだという。

〈スティングァー〉の幼体が発する生体磁場による通信障害が収まっていたのも驚きだが、無政府状態の今、ただの一企業のトップにすぎない妙齢の女性が、この状況でもまだ何かやろうとしている事の方がヴィオレには衝撃だった。

「あんな、ロゼット・ユダールの事、どれくらい知ってる？」

『え？ そうだな……私と名前が似てる！』

「あ。もういいわ」

『なんだよ!? ロゼちゃん、傷付いちやったぞ!』

市街地上空としてはギリギリの高度三百メートルを、巡航速度で飛行しながら、普段と変わらぬどうでもいい会話を通信機越しに交わす。

飛行型の〈機獣少女〉は、希少であっても貴重ではない。彼女等の使命は〈ジェネレーター〉を〈カタストロ〉から護る事であり、飛行可能である利点はない。あくまで飛行型〈カタストロ〉が出現した場合の備えであり、幸か不幸か、未だに出現は確認されていない。

彼女等の仕事は名ばかりの哨戒任務と、行事の際の曲芸飛行のみだった。

ロゼはただ飛べれば満足で、ヴィオレにも特に不満はなかった。癩なので本人には絶対と言わないが、ロゼの違反行為に付き合っつて飛ぶのも満更でもなかった。

だが、〈嵐の刃〉を託された時に気付いてしまった。自分も〈機獣少女〉として戦いたかったのだと。

「……………」  
期待されて嬉しかったのだ。

ずっと無用の長物として扱われ、悔しかったのだ。

こんな事態にならないければ、気付かないまま〈機獣少女〉を『卒業』出来たかもしれないのに。

『——ヴィオレ!』

「っ! ……なによ。声がデカいわ」



『下！ 病院っぽい建物のところ！』

通信越しにそう言いながら拳こぶしを握り、立てた親指を真下に向けて振って見せる——挑発や侮辱を意味する身振りジェスチャーではない——ロゼをチラ見し、ヴィオレは地上を見下ろす。

見つけた。飛行型の〈機獣少女〉は心肺機能と視力が特に強化されているため、高高度からでも地上の様子を確認するのは容易だ。

『ゼンジン病院』と書かれた大きめの建物の前に避難民らしき群衆と、少し離れた位置に巨大な狼オオカミのような黒い何かがいる。

「今のなに!?!」

あつという間に病院の上空を通過し、地上の景色は変わってしまう。

『私に訊かれても知らないよ。あとヴィオレ、声がデカい』

先ほどの意趣返しのもりだろう。口調からもロゼがニヤニヤしているのが伝わってきてイラっとする。

『けど、心配するようなもんじゃないんじゃない？ なんか女の子が乗ってたし、〈獣王〉と〈竜帝〉も近くにいたしさ』

大きなものに目がいつてしまいが付かなかったが、アイナ・ボグマンとルイゼ・ルンシュテッドもあの場にいたらしい。余談だが以前、侵入禁止の封鎖区域上空を飛行していた際、大量の〈ステインガー〉の幼体と交戦していた二人を救助した事がある。

ちなみに、狼のような何かの頭部が開き、操縦席らしき場所に女の子がいたのはヴィオレも気付いていた。ひよっとしたら〈ルイン〉にぶつけるため、オオカミ型の機獣を誰か

が現代に蘇らせたのかもしれない。〈嵐の刃〉による奇襲を実行した自分達のように、この状況を打破すべく、独自の行動を起こした者達がいってもおかしくはない。それにしても、あんな年端としはもいかない女の子を乗せるとは考えにくいが。

『——なあ、ヴィオレ。その〈嵐の刃〉、私にくれよ』

しばらく互いに無言で飛んでいると、唐突にロゼがそんな事を言った。彼女はすでに撃つているため発射装置は投棄しているが、ヴィオレのものは未使用のため一応、今も携行している。

「……いいけど。どうするのよ?」

『せっかくだし、〈プレケース〉の群れに撃ち込んでやろうぜ? 行きがけの家賃やちんってやつ』

「……………」

ロゼとはそれなりに長い付き合いだが、未だにこうして驚かされる事が多い。

『駄賃だちん』でしょ。ほんっと馬鹿ね』

『あれ? そうだっけ? ——ってか、馬鹿ってひどくね?!』

ロゼのこういった馬鹿な言動を時々、周囲を和ませるためにやっているのではと勘繰った事もあったが——恐らく違う。少なくとも計算ではない。彼女はただ本気で馬鹿な事を言っているだけなのだ。

「あー、もう。なんか考えるのが馬鹿々々しくなったわ」

『うん？ ヴイオレ、なんか悩んだのか？ ロゼちゃんに相談してみ？』

「結構よ。それと、あんたに無駄撃ちさせるくらいなら、〈嵐の刃〉は私が持つてるわ」

『えー。なんだよ、宝のモチ腐れだぜ？ 餅は腐る前に食わないともつたいないだろ？』

やはり馬鹿だ。なんとなく、諺の意味は合っているが、語源を勘違いしている。正しくは『宝の持ち腐れ』である、念のため。

「はいはい、そうね。もつたいないもつたいない！」

軽くスロットルレバーを押すイメージを描き、加速する。後方でロゼが遅れて加速したのが気配で判る。追い抜かれて悔しがっているに違いない。子供っぽいと思うが、少しだけ気分が良い。すぐにロゼは追いつき、ヴィオレのやや右斜め前方に位置すると、得意げに翼を左右に振って見せた。

加速した事で景色が目まぐるしく流れていき、すぐに街の外縁上空に到達する。そろそろ目標が見えてくるはずだ。

「……目標視認」

オオミヤ・シテイに向かい南部方面から飛来する〈ブレケース〉の群れを肉眼で確認。第一陣はあれで間違いないだろう。

『……あつはは。すげえ数だな、おい。多すぎて空が青く見えねえぞつと——』

明らかに空元気なロゼの声を聞きながら、ヴィオレは〈ブレケース〉確認の情報をロゼットに通信で知らせる。

『なんだって？』

「第二陣と思われる群れが北東方面から来るっぽいから、次はそっちを確認してほしいそうよ」

『よし。そんじゃ行くか！』

テンションを上げようと声を張るロゼに嘆息しながら、ヴィオレは南から飛来する〈ブレケース〉の群れを一瞥する。ただ確認させたのではなく、ロゼットには考えがあるのだと信じ、先に方向転換した相方を追った。



オオミヤ・シテイ外縁——南部方面。

何もない空間に開いた『門』の内側から現れたのは、魔女のような格好をした二人の少女。

フアフロウ姉妹の次女・タオエンと、末っ子のベアトリーチェである。

「この星って、文明レベルの割りには荒野や手付かずの土地が多いよね」  
辺りを見回し、ベアトリーチェが率直な感想を口にする。

背後に見える都市部を除けば、見渡す限り荒野である。文字通り荒れ果てている訳ではないが、街道と呼べるような整備や舗装は何もされておらず、これはこの周辺に限った話ではない。

「どことなくですが、不要な開発は避けているような節があります。かつては巨大な機獣と共に在るのが当たり前だったようですから、その名残りかもしれませんね」

人々が機獣に乗って地を駆け、共に戦った時代があり、その戦場となり得る土地を無粋な開発で汚してはならない。そういった考えが未だに根付いているのではないかとタオエンは語った。

「ふうん……やっぱり似てるね、此処」

「あの世界にですか？ そうですね、極めて近いと言えるでしょう」

二人は封印施設の調査に向かった先で、緊急避難として別の世界に渡った。その世界には二つの月が浮かび、地上を占める荒野の割合が多く、この星という機獣と思しき巨大な金属生命体が存在していた。

余談だが、其処には並行世界の同一存在であろう 橘アサトとベアトリーチェがいた。驚くべきは、ベアトリーチェが件の金属生命体として存在していた事だ。

「なんて言ってる間に——」

南の空に『点』がぼつぼつと浮かび上がる。まだかなり距離があるが、報告にあった『レケース』の群れだろう。惑星全土から東方大陸に集まっており、あれは第一陣に過ぎないらしい。

「……多くない!？」

距離が縮まるにつれ『点』の密度が濃くなり、やがて『面』になっていく。奥行きがある事を考慮すれば、なるほど、あの数は『群れ』と呼ぶに相応しい。

その規模はベアトリーチェが悲鳴を上げるほどだった。

「確かに我々だけでは手に余りそうです」

「!」

姉の言葉に、ベアトリーチェが閃いたような表情を浮かべる。直前に悲鳴を上げていたのが勘違いだったのではと思わせる笑顔で、ニマニマと期待に満ちた眼差しを向けてくる。

「……………」

それを見て、〈フレケース〉の物量に対しても無表情を崩さなかったタオエンが、やれやれといった様子で嘆息する。

「仕方ありませんね」

タオエンは少し屈んでベアトリーチェと目線の高さを合わせると、何事か呟き、妹の頬に軽い口づけをした。

ベアトリーチェは強い。強すぎると言ってもいい。

往々にして強すぎる力は不幸を呼ぶ。まだ精神的にも幼い妹の強さに危機感を持ったタオエンは、彼女を護るため暗示による制限を設定した。自分が解除しなければ全力を出せないようにするためだ。ベアトリーチェもそれは理解している。

「多少の無茶は構いませんが、無理はせぬよう」

「はいー！」

制限を解除したタオエンがやんわりと言い含めて送り出すと、ベアトリーチェは理解しているのかと疑わしくなる無邪気さで答え、迎撃準備を始めた。

「ヘトーレ・アルコン——頭われよ！」

数歩進んで高らかに唱えると、最初から握っていたかのようにベアトリーチェの手には銃が出現していた。銃身が上下に並んだ、小銃よりも全身が短めの騎兵銃〈フエーデ・フレツチエ〉である。

「最初から全力でいつちやうよ」

被っていた鎧の広いとんがり帽子を逆さにし、本来は頭部を収めるべき空間に、出現させたばかりの得物を放り込む。騎兵銃が物理法則を無視して帽子の中に消えると、ベアトリーチェの頭上の景色が揺らぎ、次の瞬間には夥しい数の武器が出現していた。空中に何の支えもなく。

やはり最初から存在していたかのように。

「モード・サルヴァー——三位一体の女神よ来たれー！」

指揮官の号令一下、すべてに射手がいるかのように何十丁もの武器が火を噴く。

高出力・高密度のビームを対象を消し飛ばす長砲身ライフル〈デア・フレツチエ〉。上下の銃口から交互に、連続して単発のビームを撃ち込む二連装カービン〈フエーデ・フレツチエ〉。

様々な弾頭を状況に応じて装填可能な三連装ミサイル・ポッド〈ネーメズイ・フレッチエ〉。

通常であれば一種類を一丁だけ携行し、状況の変化に応じて持ち替えるのだが、それを全種、しかも複数同時に運用するベアトリーチェの『全力』

それがこの『モード・サルヴァ』だ。

まず高密度のビームが〈ブレイクス〉の群れの先頭から内部を抉る。次に各種弾頭をそれぞれ満載した多弾頭ミサイルが、榴弾や焼夷弾、金属の礫である球状弾の雨を浴びせる。掻い潜ってきた個体も機銃のように撃ち込まれるビームに阻まれ、次の高密度ビームと多弾頭ミサイルの発射によって、消し飛ばはされるか撃ち落とされる。

三種の武器の特性を活かした見事な連携と言えるだろう。

「——あはっ☆」

思わずといった様子で笑い声を漏らすベアトリーチェ。帽子を脱いだことで露になった頭部のネコミミが、声に合わせてぴくりと震えた。

その僅かな間にも次々と〈ブレイクス〉の群れが削られていく。この分なら、第一陣については早々に殲滅出来るだろう。

だが、あくまで氷山の一角に過ぎず、ベアトリーチェが担当出来るのは南側から侵攻してくる群れだけだ。

(そちらは頼みましたよ、姉さん)

奮闘する妹の背中を見守りながら、タオエンは内心で呟いた。



オオミヤ・シテイ外縁——北東方面

〈L.C. ファクトリー〉に帰還し、破損した推進システムの応急処置を済ませたクラウド・P・ブランは、ロゼットに言われるがままこの場に連れてこられていた。

「……………」

無言でチラと、自分を連れてきた人物を視界に入れる。先ほど戻ってきたばかりだと言っていたファフロウ姉妹——南部方面の迎撃をすと言って、少し前に出て行った——と共通デザインの魔女のような衣装を身に纏い、なぜか屋台で売られているようなお面で顔を隠している。

体格からいって高校生か大学生くらいだろう。クラウドのように実は小学生——という事はないと思う。凜とした、それでいてやや近寄りがたい雰囲気は、特殊な環境で育ったと

しても十歳そこそこでは出せないはずだ。

(なんだろう。よく知っている人に似ていて、すごく気になる……)

女性は出ていく際に見せたタオエンと同じ不可思議な力で、此処ここに繋がる『門』を開き、到着してからも一言も発さない。ロゼットから彼女の指示に従うように言われていなければ、すぐにでも「ヘルイン」と戦っている友人の加勢に行きたいところだが、その友人と重なって見えて仕方がないのだ。

外見や雰囲気はまるで違う。地球で「カタストロ」に意識を奪われて戦った時のやみひめとなら一致するが、そういう事ではない。もっと本質的な、存在に関わる部分で似ていると感じる。「L. C. ファクトリー」に帰還する直前に見た、巨大な黒い狼オオカミのような何かを見た時に感じたのと同じ感覚を、この女性にも感じるのだ。

「――御出座しだ」

「え……？」

『お面の魔女』が初めて口を利いた。ただでさえ口元が隠れているため一瞬、誰がしゃべったのか判らなかつたが、此処ここにはクラウドと彼女しかいない。

視線を前方に向けてると、まだかなり遠い距離に無数の『点』が見える。徐々にそれらが大きくなり、詳細が見えてきた。昆虫と爬虫類と軟体動物を継ぎ接ぎつぎはしたような奇怪な合キメラ成獣。

「プレケース」の群れだ。

「あんなに……」

多すぎて数える気にもならない。少なくとも、たった二人でどうにか出来るとは思えない量だ。

「〈クロヤシヤ〉――顕エグゼキュートわれよ」

戦意を喪失しかけていたクラウドを他所よそに、『お面の魔女』は何時いつの間にか武器を手にしていた。剣のようだが、握りグリップの上下に片刃かたばの剣身が付いており、機械的な印象を受ける。

「バスター・スラッシュ」

続けて彼女が発すると、ガキーンという音と同時に刃の付いた部分を外側にして剣身たが畳まれ、一直線たただったものが二等辺三角形へと変わった。似た形状の武器を挙げるなら、ファンタジー作品に登場する『カタール』だろうか。

『お面の魔女』は右手に持ったその先端が左肩より後ろに来るように構え、

「――ッ！」

無造作なに薙ぎ払った。

〈クロヤシヤ〉――恐らく武器の名前だろう――を左上から右下に袈裟斬りけさする瞬間、刃

の部分が赤く発光し、長大な光の剣身を形成した。その切っ先は一瞬で〈ブレケース〉の群れの最後尾まで達し、何百という数を切断しながら斜めに振り下ろされ、返す刀で真上に振り上げられると、今度は左下に向かって振り下ろされた。

超長大な紅い光が線を描く度に、敵といえ命が冗談のように消えていく光景は、あまりに無慈悲すぎて悪趣味ですらあるようにクラウドは思えた。敵は自分達を殺しに来ていて、殺さなければ殺されるのは判っている。だとしても、この絵面は一方的にすぎる。

そんな風を感じてしまうほど、一方的で圧倒的な光景だった。

「ふむ——」

〈クロヤシヤ〉の畳まれていた剣身が開き、元の形態に戻った得物に異常がない事を確認すると、『お面の魔女』は〈ブレケース〉の生き残りを一瞥し、背を向けていたクラウドに向き直った。

「残りは頼む。それが片付いたなら、後は好きにすればいい」

お面で表情は見えないが、口調から疲弊した様子は感じられない。長くは戦えない理由があるのか、あるいは後続に備えて力を温存しておきたいのかもしれない。〈ブレケース〉の群れはこれですべてではないのだから。

だが、割合としては僅かとはいえ、数で言えば四十体ほど残っている。クラウド一人では不可能だ。彼女のMBデバイス〈ラインハイト〉は非常に強力で、その装備も高性能の一語に尽きるが、それでも〈機獣少女〉という枠組みからは外れていない。

「問題ない。背中を向けてみる」

返事に窮していると、『お面の魔女』はそう言ってクラウドに後ろを向かせ、背中に掌を当てた。

「じつとしている。少しくすぐったいぞ」

「へ……? — ひゃっ!!」

自分の中から知らない何かを引き出されているような、これまでに感じた事のない感覚。MBデバイスを起動させる時の、自分の中身が書き換わるような感じに似ているが、入れ替わっていくような感じもあり、やはり端的には表現出来ない。

『——起動します』

未知の感覚に戸惑っていると、クラウドの左手の中指に嵌められた黒曜石のような指輪——待機状態の〈ラインハイト〉が勝手に起動した。主の指示もないまま、〈機獣少女〉の戦装束であるMBジャケットが展開していく。

「これって……」

装着が完了したMBジャケットをざっと見渡す。以前の〈ラインハイト〉は、ロングド

レスに機械的な部品が多く装備されていたが、変化した今はほぼすべてが機械と装甲で構成されている。以前はまだ〈機獣少女らしさ〉というか、『服』っぽさが辛うじて残っていたが、これは完全に『武装』だ。ジャンルのにはライカ・ユズキやバニラ・イカルガのものに近い。

「……………」

不思議と変化に対する驚きはなく、元々こうだった気すらしてしまう。

そのように感じる自分に戸惑っていると、「やれるな?」と声をかけられた。

クラウは肯定の意味を込めて頷き、接近する残敵を見上げる。つい先まで一人では無理だと思っていたのが嘘のようだ。

「あの、あなたは——」

確認する事に意味などない。だがそれでも、彼女の事が気になり、クラウは『お面の魔女』に訊ねようとした。

「通りすがりの〈エグゼキューター〉だ。…: 覚えなくていい」

だが、最後まで言い切らぬうちに『お面の魔女』はクラウの言葉を遮り、そう答えた。

「そう…: うん、判った」

これ以上は答えてくれないだろうし、追及する気もない。むしろ、不思議と今の言葉でクラウには充分だった。

背中 of 飛行ユニットを展開し、推進装置を作動させる。跳躍も組み合わせさせて離陸し、一気に上昇する。以前の〈ラインハイト〉と同じ感覚で使えるのを確認し、クラウは残りの〈プレケース〉を迎え撃つ。

「——すごい……」

出力は上昇しているのに、振り回される感じがまるでない。完全に『自分の手足のように』使いこなせる。

「——ッ!」

両腕の内側からエネルギー・ブレードを生成し、背部の主推進器で加速。すれ違いざまに次々と、距離の近いものから斬って捨てていく。

(あれ…: …?)

違和感を覚え一瞬、クラウの動きが単調になる。その隙を狙うように直上から降ってきた〈プレケース〉の突撃に対し、コンパクトになった腕の複合兵装の表面で勢いを受け流すと、位置を入れ替えるように頭上を取り、両腕の光の剣を交差させ斬りつける。(飛べるだけで、空戦が得意な訳じゃない…: …?)

背中に巨大な十字傷を刻まれ、体液を撒き散らしながら落ちていく〈プレケース〉を視



界の端に捉えながら、クラウはそう感じた。変化したMBジャケットの性能ももちろんあるだろうが、それにしても呆気ない。

(だったら——！)

エネルギー・ブレードを解除し、ENマテリアル・クローを生成。別の個体の懐に飛び込み、物質化に近い状態の三枚の刃を突き刺す。右腕を中心に現出したクリアパールのそれは、文字通り獣の鉤爪のようだ。

——ギイイッ！

凶器を突き立てられて苦悶の声を上げる〈ブレイクス〉ごと空中で前進し、別の個体数を巻き込みつつ、僅かになった群れの中心を突っ切る。何体かは跳ね飛ばされたようだが、衝撃によるダメージで動けず、それなりの数が団子状に固まっていた。

(やっぱり、空中ではそこまで自由に動けないんだ)

クラウはENマテリアル・クローを最初の個体から抜き、その反動を利用して距離を取る。両腕を正面に伸ばし、エネルギー・ブレードを生成していた射出口からビーム・ガンを連続して撃ち込む。背中に展開したウイングと腰部装甲に内蔵された副推進装置によって、対地ヘリのように空中を旋回しつつ、団子状になった敵を少しずつ、しかし確実に削り取っていく。

このペースならあつという間に終わらせられる。そう確信し、クラウは残敵の掃討を続けた。



破壊された街並みを駆け抜ける漆黒の巨大な狼——〈ヤミヒメ〉だ。

カナコ・T・シングウジはその巨大な機体の上から、後方に流れていく景色を眺めつつ、頭では少し前の出来事を思い返していた。

兄のアサトを〈ヤミヒメ〉に乗せようとする紅桜と衝突した時の事だ。唐突に流れ込んできた大量の情報を『受信』した。

まず驚いたのは、情報の『送信者』がタオエンだった事。妹のベアトリーチェと共に消息不明となっていた彼女が戻ってきていたのだ。

先に『波動』を受けた際に幻視した神話の時代——惑星ゼヘナの遠い過去で起きたハイデマリー・I・エイミスの悲劇。この情報を『送信』するタオエンの能力は、そのハイデマリーと同じ『回線』を利用したものではないだろうか。なんとなくだが、カナコにはそう思えてならなかった。

つまりタオエンも〈異能者〉に連なる存在なのではないかと。ともあれ——今は『受信』した情報の整理が先だ。

タオエンはすでにロゼットと接触し、状況をほぼ把握していた。優先すべきは超巨大機獣〈ルイン〉への対処であり、まずはその力を削ぐ事だと。そのための手段がアサトとやみひめ、そしてこの機獣である〈ヤミヒメ〉だった。

「——」  
面白くない。

アサトが関わっているのに、自分が除け者で、なのにやみひめは必要とされている。それがカナコには面白くなかった。

『——カナコ』

「っ！ は、はい。なんですか、兄さん」

『ん？ どうかしたか？』

「いえ、なんでもありません」

別に後ろめたい事など何もない。急に最愛の人から声をかけられて驚いた——それだけの事だ。

『そうか。そろそろ見えてくるぞ』

通信状態が回復した事で、操縦席のアサトともMBデバイスの通信機能を利用して会話が可能となっていた。

「判りました。兄さんはくれぐれも無理をしないでください」

『疲れる事は極力しない主義だ。お前も無理なんてしなくていい』

「兄さん、そんなにも私の事を想ってくれて……好き——」

『え？ あ、うん……』

きつと照れているのだろう。そうに違いない。

アサトが可愛い妹の素直な言葉で引く事などない。ましてや、『重たい』と感じるなどありえないのだから。

『……デカいな』

やがて目標を間近に捉え、その巨大さと破壊力を目の当たりにし、通信越しのアサトの声に緊張が走る。

〈ルイン〉だ。



破壊による被害が加速度的に広がっていく。

『骨』を思わせるテイラノサウルス型大型機獣を捕食した事で、ヘルインの凶暴性が解放された結果だった。

「……つく——」

口腔部から発射される〈ヘルイン〉の荷電粒子砲を〈防ぐもの〉で防ぎながら、やみひめは周辺にテニスボール大の紅い光球を複数出現させる。

やみひめの持つ〈E. I. アビリティ〉。その重複起動である。

背中に展開している鋭利な刃のような六枚の羽根——能力を制御するためのアンテナが微細な振動を放つ。

「——撃って——」

荷電粒子砲を受け止めている紅い防壁の左右を抜け、やみひめの命令を受けた十数発の光球が〈ヘルイン〉の頭部に殺到する。

着弾、爆発——即ちエネルギーを解放し、紅い光が生まれた。高熱に巻かれ荷電粒子砲の発射は途絶えたが、しかし与えられたダメージは微々たるもので、頭部の装甲を僅かに焦がした程度だった。

〈防ぐもの〉は維持したまま、次の攻撃に耐える。〈ヘルイン〉の巨大な腕に備わった鋭利な爪が、防壁を破ろうと何度も突き立てられる。衝撃と嫌な音が神経を擦り減らす。

「——やみひめさん……」

弱々しい声が背中に届く。首だけで振り向くと、アヤカ・シユバイツァーに应急処置を受けているツバキが、何か言いたそうに、けど何を言っていないか判らないといった様子でこちらを見ている。彼女は先の〈ヘルイン〉の無差別攻撃によるビルの倒壊に巻き込まれ、足を負傷していた。

「大丈夫！ 大丈夫だから……！」

そう言つて視線を前に戻す。これ以上ツバキに言わせてはいけない。『自分の事はいい』とか、そんな事を言うに決まっているから。

だが、この状況はジリ貧だ。ツバキを避難させないといけないが、〈ヘルイン〉を放置も出来ない。好きにさせたら、先ほどの『輪』を使った攻撃で、次は別の場所を狙うかもしれない。今はこの場に留めておくしかないが、やみひめの負担が大きすぎる。

(せめて自由に動ければ……)

タオエンから『送信』された情報で希望が生まれた。きっと紅桜と合流したアサトも向かって来てくれているはずなのだ。展開した〈防ぐもの〉で猛攻に耐えつつ、やみひめは起死回生の時を待った。

「……?!」

〈ルイン〉の背後に着弾。やみひめでもアヤカでも、当然ツバキの攻撃でもない。

時間差で〈ルイン〉の左側面から無数の『刀』<sup>カタナ</sup>が降り注ぎ、装甲に次々と突き刺さり、爆発を起こす。

以前にも見た、カナコの機力を使った応用技だ。という事は、最初の着弾は〈ヤミヒメ〉による砲撃だろう。

「ようやく来たわね。こっちも——」

アヤカが隣に並び、待ちかねたように言うと、上空に視線を向けた。やみひめがその視線の先を追うと、空中で何かが光った。それは紫と白が入り混じった青白い光弾で、うねり、バチバチと放電を伴いながら、〈ルイン〉の右側面を直撃した。

発射地点に目を凝らすと、滞空する人型の存在があった。

巨大な羽根を備えた、見た事のないMBジャケットだが、その装着者はよく知っている。胸部の装甲が細かい動き——開いていたのが閉じたような——をすると、彼女は急降下する勢いでやみひめの前に降り立った。

「クラウ！ 来てくれたんだね！」

上空に現れ、先ほどの光弾を撃ち込んだのは、友人のクラウだった。MBジャケットがかなり変化しているが、何か事情があったのだろう。

「……………っ！」

「えっ!? く、クラウ……っ?」

顔をくしゃしゃにし、嗚咽<sup>おえつ</sup>を上げるクラウに抱きしめられた。身長差があるため、顔がゴツゴツした胸の装甲に当たって少し痛い。

「良かった……無事だつて聞いてたけど……本当に良かった……良かったよ——」

「クラウ……。うん、無事だよ。ありがとう」

自分のために泣いて、喜んでくれる友人の背中に腕を回し、抱き締め返す。やはり装甲が固くて少し痛かった。

「いやはやいやはや。とつてもキマシであたしはずっと眺<sup>なが</sup>めてたいんだけど、そうもいかないみたいよ」

ツバキをお姫様抱っこしたアヤカが、そう言って視線を向ける先では、〈ルイン〉がまた動き出そうとしていた。

「じゃあ——はい、お姫様は頼んだよ」

「え、わっ……」

有無を言わさずアヤカからツバキを任される。身体能力が強化されているためか、腕の

中の少女をとでも小さく軽いと感じる。やみひと一つしか違わず、体格もほぼ変わらないはずなのに、それでも。

「ここはあたし達に任せて。そっちは、やみ子ちゃん達に任せるから」  
「あ……」

これからは別行動だ。それは仕方のない事だと判っている。

それでも――

「――行きなさい、流遠やみひめ」

何時の間に来ていたのか、カナコが静かに言った。面の奥からツバキを氣遣うような視線を感じたが、すぐに光の反射具合で表情は見えなくなる。

「兄さんとツバキに何かあつたら、許さないから」

「カナコさん……」

ずっと申し訳なさそうにしていたツバキの表情が、少しだけ綻んだ。

「行って、やみひめ。全部終わらせて、一緒に帰ろう？」

涙を拭って普段の調子に戻ったクラウも、そう言っって背中を押してくれる。

「任せて。今の私、メチャクチャ強いから……!!」

珍しく自信満々な様子でアピールしてみせる友人の姿が、やみひめはなんだか可笑しくて笑ってしまった。

「え!? な、なんで笑うの……!!」

「だってクラウ、そういうのキャラにないから……あははっ」

そうして別れを惜しんでいると、

『――やみ子、急げ!』

アサトの声がカナコのMBデバイスの通信機能を通して聞こえた。(ルイン)が動き出したのだ。今はアサトが砲撃で気を引いてくれているが、もう限界だ。

やみひめはツバキを抱き抱えたまま全真を見渡し、「また後でね」と告げた。



オオミヤ・シテイ外縁――北西方面

この方面には、まだ(ブレイクス)の襲来はない。

「――よし!」

軽く周辺を走り、跳ね、推進装置の調子も確かめたアエラ・カートライトは、整備を受けた(フェンサー)の出来に満足していた。

対大型〈カタストロ〉を想定して検討され、古代種〈ステインガー〉の出現がなければ机上の空論として終わっていたかもしれない規格外のMBジャケット。期せずして〈ルイン〉攻略のための切札として実戦投入されたが、残念ながら成果は得られなかった。

とはいえ、アエラの適正もあって〈フェンサー〉の有用性は証明され、戦力を遊ばせておく余裕もないため、可能な限りの手を尽くして修復されていた。

弾は僅かだが、バトルカノン砲と散弾迫撃砲は予備を搭載し、〈グレートシールド Mk. II〉に関しては、試作品を最低限、実戦に耐えられるよう改修してもらった。少なくとも、見てくれだけなら遜色ない仕上がりである。さすがに〈ブラストホールスピアEXII〉はどうにもならなかったが、大量の敵を迎え撃つならサブマシンガンの方が有効だろう。

「よしーじゃないですよ、アエラ。くれぐれも急場凌ぎの状態だということを忘れないように」

やれやれといった様子で、自分の装備の調整をしていたバナライカルガが言い含める。

「無論ですとも！ バニラ姉様は今回もスナイパー装備なのですね」

彼女には汎用性に優れた普段使いの装備があるが、先の〈BO作戦〉に引き続きスナイパー装備のままである。大量の〈プレケース〉を迎撃するのなら正しい選択だろう。

「ええ。〈サンダー・ボルト〉を回収しておいて正解でした」

バナラのスナイパー装備における主兵装である大型電磁狙撃銃。

〈BO作戦〉では想定外の白兵戦となり、一度は手放してしまっていたのだ。今は整備を受け、万全の状態に戻っているが、やはり弾数が心許ない。なので一応、近接戦闘用の〈ベリルランス〉と〈ベリルランスII〉、他にも運べるだけの武器・弾薬がバナラの背後には並んでいて、何かの『闇市』のような状態になっていた。

「やはりバナラ姉様にはスナイパー装備が似合います」

「そう？ ありがとう」

〈機獣少女〉としては後輩であり、プライベートでも妹分的な存在であるアエラの替辞に、バナラは先輩らしくスマートに答えてみせた。

「——同感だ。あたしもバナラはスナイパー装備が一番好きだよ」

会話に加わったのはライカ・ユズキ。アエラにとっては〈機獣少女〉の先輩で、プライベートでは姉的な存在。そしてバナラとは同期で親友という間柄だ。

〈ヒナミ総力戦〉で消息不明となっていたが、〈BO作戦〉に駆け付け、バナラとアエラの窮地を救ってくれた。

「ふえっ?! 好きって、な、なにを……?!」

ライカの不意打ちに、バナラのスマートな先輩像が崩れる。銃口を磨いていたハンドガ

ンを手から滑らせ、並べてあった弾倉がドミノ倒しになっていく。動揺が半端ではない。

「ああっ!？」

「おいおい。大丈夫か、バナラ?」

「大丈夫じゃありません! ……あなたが変な事言うから——もうっ」

「さすがです、ライカ姉様! 普段はクールなバナラ姉様を、こんなにも動揺させられるとは」

「だろ? あたふたしてる時のバナラは可愛いな」

「はい! あたふたしている時の——いえ、あたふたしている時もバナラ姉様は可愛らしいです!」

「なんなんですか!? 新手の嫌がらせですか、これは……!？」

ライカとアエラにバナラがイジラれている頃、同じ北西方面に到着する三人の〈機獣少女〉がいた。

リツ・ミナトとモカ・カワイ、そしてキリエ・ソウマだ。彼女等はゼンジン病院からシエルトーに避難するグループと別れ、オオミヤ・シティに向かっている〈プレケース〉迎撃のためやって来ていた。

「……なんだか賑やかな人達もいますね」

同じように集まった〈機獣少女〉が、いくつかのグループに分かれて固まっている。その一つを指して最年少のモカが言った。

「〈FA:Gエンタテインメント〉の連中よ。相変わらず目立ってて気に入らないわ」

「パイセン、そうやって手当たり次第に噛みついてるから友達いないんじゃないの?」

忌々し気に言うキリエに対し、齒に衣着せぬ物言いのリツ。慫慂無礼ですらない。

「はあ!? 友達くらい普通に……いつ、いつ、いる——いるわよ!!」

「あ、なんかごめん……うわ、まさか本当にいないとかマジないわ」

「いるって言うってんでしょ!？」

「あのっ。私達、友達ですよ、〈グングニル〉さん!」

「モカ、今『私達』って言った? それ私も入ってるの? ……別にいいけど」

「要らないわよ! あんた達も死ねばいいのに……!!」

年下の後輩二人の気遣い——と言っいいいは微妙だが——に、更に逆上するキリエ。

「ねえ、あれ『魔槍の人』じゃない?」

「本当だ。友達いたのね」

「この状況でもあんなに元気なんて、ちよつと羨ましいわ……」  
遠巻きにしていた数人の〈機獣少女〉の会話がリツの耳に届いた。ちなみに『魔槍の人』  
というのはキリエだろう。

彼女等の言う通り、やがてこの辺りも戦場になる。それも激戦に。  
オオミヤ・シテイに向かっている〈ブレケース〉の総数は不明だが、今この場に集まっ  
ている百人に満たない人数で護りきれるとは思えない。

「……………」

だが、迎撃の指示を出したのはロゼットなのだ。何か策があるのだろうか。

此処ここに集まったのは、そう信じた者達だった。

「——リツ先輩！」

「……来たわね」

モカの指す方角に、ぼつぼつと小さな点が見えてくる。飛んでいる姿は初めて見た。

〈ブレケース〉の群れだ。

「すごい数ですよ……?」

「はん！ やってやろうじゃない！ 怖気づいたなら、さっさと帰りなさい！」

「じゃあパイセン、あとよろしく。帰るわよ、モカ」

「ちよ、ちよつと!?!」

「冗談よ」

帰りたいのは本当だが、逃げ場などない。

街には〈ルイン〉がいて、外からは〈ブレケース〉が来る。

抗あらがうしかないのだ。



〈ルイン〉から距離を取り、身を潜められそうな場所を探す。周囲の状況が把握出来れば  
更に良い。

「アサト、あのビルの横に〈ヤミヒメ〉を格納可能な倉庫があります」

〈ヤミヒメ〉の操縦席——正面モニターに該当する場所が映し出され、続けて順路が表示  
される。

「見晴らしも良いし、そこにするか」

サブ・シートサフ・シート ベにお 後部座席の紅桜の提案を採用し、前部座席のアサトが〈ヤミヒメ〉に指示を送る。機獣  
の操縦はほほ思考するだけで、操縦桿は握っているだけと言ってもいい。訓練を受けて



いなくとも動かせてしまう。

(つっても、初めて動かす気がしないんだよね……)

やはり戦闘のような激しい動きは負担が大きいが、ただ走らせる分には問題ない。この操縦席コックピットも妙に馴染む。不思議な気分だ。

「やみ子はついてきてるか？」

「はい。後方約三十メートルを維持しています」

「ん」

機体が目的地に着く。幸い、倉庫の中はほぼ空で、ちょうどいい高さに窓もある。さすがにカナコ達の姿までは見えないが、〈ルイン〉の動きは丸見えだ。

「……………」

アサトは砲撃をただけだが、あんなのと戦ったのかと思うと、今更ながら背筋が寒くなる。そして、カナコ達は今も戦っているのだ。うかうかしてはいられない。

〈ヤミヒメ〉を降り、追いついてきたやみひめを迎える。なぜかツバキをお姫様抱っこしている。怪我けがでもしたのだろうか。

「——アサトっ！」

「おわっ?!」

やみひめに勢いよく飛びつかれ、受け止めきれず尻もちをつくアサト。自分が今、超人になっている自覚がないのだろうか。

「…………お前な」

「あはは……ごめんなさい。——あつ。ツバキ、大丈夫!?!」

ツバキを抱えていた事すら頭から抜けていたらしい。それだけアサトとの再会で感極まっていたのだらう。ずっと〈ヤミヒメ〉の操縦席コックピットで、モニター越しだったのだから。

「だ、大丈夫です……それより、あの、この状態は——」

「あ——」

ツバキの小さな身体からだはすっぽりとアサトの上半身に収まり、またもお姫様抱っこされるような格好になっていた。しかもアサトは座った状態——やみひめが押し倒したのだが——で、ツバキは彼の胸元に身を預けるような姿勢のため、ただならぬ状況というか、やたらと背徳的な絵面えづらとなっていた。

「…………た、たちはな 橘たちばなさん?」

「う…………」

すぐ間近にツバキの顔があり、やや頬ほおを赤らめた様子で、何かを訴えかけるような表情を浮かべている。ツバキはまだ小学生五年生だが、恐ろしく大人びており、普通に子供と

は思えないのだ。これは非常によろしくない。

「もう！ アサトの馬鹿！ 私、やっと戻ってきたのに……っ!!」

腕を引かれ、強引にやみひめの方を向かされる。こちらは年齢相応に子供らしく、判りやすくむくれている。

「……なんか、安心するわ」

「へ？」

「なんでもない。——おかえり、やみ子」

「……………。うん——ただいま!」

改めてやみひめが飛び込んでくる。今度は加減をしてくれたらしいが、またツバキの事は忘れてる。

「ちよつと、やみひめさん……っ」

「ああつ、ごめん……?!」

二人分の少女の重みを感じながら、やかましいながらも、この状況に少し懐かしさ覚えた。たかだか半月前の出来事であるにも関わらず、地球での記憶がずっと昔のように思える。

「——そろそろいいでしょうか？」

頭上から降ってきた抑揚のない声に、三人でハツとなる。見上げると、メイド服を着た紅い髪の幼女が、〈ヤミヒメ〉の操縦席から表情の見えない眼鏡越しにこちらを見降ろしていた。

そうだ。急がなければ被害が拡大していく。カナコ達のように今も戦っている〈機獣少女〉だっている。内心で紅桜に感謝しつつ、アサトは訊ねた。

「紅桜、例の場所を教えてください」

「すぐ目の前です。胸部ブロック右側手前の分割線を開くと、操作把手があります」  
やみひめとツバキを下ろし、該当箇所を探す。

「これか——」

蓋状の覆いを開き、中の把手を『OPEN』と書いてある方向に回す。すると〈ヤミヒメ〉の胸部ブロックの正面が開き、中に鎮座する巨大な球体が露になった。

「……………」

あまりの生命力に言葉を失う。

機獣にとって心臓以上の意味を持つ、金属生命体の中枢——『コア』である。

「光ってる……」

「鼓動も聞こえます……」

やみひめと、彼女にまたお姫様抱っこされたツバキも、その神秘性や力強さといったものを感じているようだった。

「じゃあ、行ってくるね。ツバキをお願い」

「ああ」

ツバキをお姫様抱っこする事を変に意識しないよう努めつつ、やみひめと代わろうと身構えた直後――

「――ツバキもそのまま、やみひめとコア・ルームに入れと（ヤミヒメ）が言っています」

……………。

紅桜の言葉に、誰も思考が追いつかず言葉を失った。



オオミヤ・シティ地下シエルター。

大規模災害用に建造された緊急避難用施設であり、本来は解放に行政機関の指示が要る。だが、今の東方大陸は無政府状態で、オオミヤ・シティの行政機関も機能していないため、『ロゼット・コダール』の権限でこうして避難民に解放されていた。配給や備品のチェックも、多くは（L・C・ファクトリー）の所員と有志によって行われている。

「……………」

忙しそうに動いている所員達を横目に、実質的な戦力外通知を受けたロゼットは、やや悲哀を感じさせる雰囲気（ひげ）で膝を抱えていた。

確かに彼女は得意分野以外は何も出来ない類（たぐい）の人間だ。普通にやればいいものを、調理器具を自作して料理を台無しにしたり、やはり掃除機を自作して部屋を破壊してしまったり、かといって普通にやるとなると気力がゼロになって出来ない。

いわゆる典型的な天才気質と言える。

ロゼットが会社で寝泊まりしがちなのも、散らかれば誰かが掃除してくれるし、食堂に行けば食事が出来るからだっったりする。洗濯物については、今は補佐をしてきているシオリ・ユウキが、見かねて時々、まとめて業者に出してくれている。以前は近所のコインランドリーだったが、匙（さじ）を投げられてしまった。

そんなロゼットのプライベートを知っているからこそ、シオリは『所長は休んでいてください』と言ったのだらうが、本音を翻訳するなら『何もしないでください』だらう。はつきりともを言う彼女がこういう言い方をするという事は、よほど気を遣（つか）われているという事になる。

「……アニス、私ってなんにも出来ないね」

かたわ  
傍らで眠る妙齢の女性に語りかける。

本来は〈アニメウルペス〉という古代種と呼ばれる機獣だが、ロゼットはこの姿しか知らない。初代——つまり本来のロゼット・コダールが手掛けた機獣で、それが何時しか人の姿を採り、襲名を続けている今でも『ロゼット・コダール』を支え続けてくれている。

先の〈ヒナミ総力戦〉では、クラウドを庇って重傷を負ったと聞いている。以来、今も意識は戻っていない。

「——おねえちゃん、ごびようきななの?」

幼い声のした方に顔を向けると、まだ小学校に上がったかどうかといった年齢の女の子が、眠っているアニスを指して言った。

「違うよ。疲れて眠ってるだけ。皆のために、すごくたくさん頑張ってくれたから」

「〈きじゅうしょうじょ〉なの?」

瞳を輝かせて問う幼い子供に、ロゼットは少し迷ったが、「そうだよ」と答えた。説明のしようがないので仕方ない。

「じゃあ、これ!」

女の子がポケットから取り出した個別包装の飴を受け取る。

「くれるの?」

「おねえちゃんがおきたらあげて! ありがとうって!」

そう言っただけの子は行ってしまった。目で追うと母親らしき女性が待っていて、ロゼットに会釈をすると、一緒に自分達に割り当てられたスペースに戻っていく。

「よかったね、アニス。ありがとうだって」

静かに眠り続けるアニスの表情が、心なしか穏やかになった気がした。

邪魔かもしれないが、やはり何か手伝おう。

邪魔にならない程度に——そう決め、ロゼットは立ち上がった。

すると——

「ロゼット、此処にいたか」

「少し探してしまいましたわ」

自分に向けられた声に振り向くと、蒼い髪の小柄な少女と、紅い髪の長身の娘がいた。対照的な容姿だが、これで同年年というのだから個人差というのは恐ろしい。

共に『二つ名』持ちの〈機獣少女〉——〈獅子王〉アイナ・ボーグマンと〈竜帝〉ルイゼ・ルンシュテッドである。

「此処にいるって事は、もしかして……」

「アイナとルイゼは〈ヒナミ総力戦〉でMBデバイスを破損したが、それ以前に何時、『卒業』するタイミングが来てもおかしくなかった。〈機獣少女〉でいられる時間には限りがある。ほとんどが二十歳を迎える前に、MBコアの活性値が基準に満たなくなってしまうのだ。」

「それもあるが、今は避難民を送り届けてきたところだ」

「アイナの視線の先に、スタッフから案内を受けている、それらしい一団が見えた。その中には見覚えのある少女もいる。」

「ミズキ？」

「オイカワさんは避難所になっていたゼンジン病院を、同じ事務所の方々と護っていたんです。ワタクシ達はそれに合流して、此処まで同行させていただきましたの」

「ミズキ・オイカワはツバキやカナコと同じ〈オフィス・タカマガハラ〉の〈機獣少女〉で、今のアイナとルイゼ同様、MBコアの活性値が低下したため予備役となっていたはずだ。」

「無茶だなあ……」

「私は〈ブレケース〉の迎撃に行くと言ったんだがな」

「いけません。戦闘中にMBジャケットが維持出来なくなったりしたら、目も当てられませんが」

「不満を漏らすアイナに、ルイゼが苦言を呈する。まだ戦えるが、そのレベルでMBコアの活性値は低下しているという事か。」

「二人は充分すぎるくらいに良く戦ってくれたよ。おつかれさま」

「ロゼットの劳いの言葉に二人が黙り込む。改めて言葉にされた事で、〈機獣少女〉としての終わりに実感が湧いてきたのかもしれない。」

「彼女はまだ目覚めないのだな」

「しみりしそうになったためか、アニスに気付いたアイナが話題を変えた。二人は〈ヒナミ総力戦〉でアニスとは面識がある。」

「彼女がいなければ、ワタクシ達は此処にいなかったかもしれません。感謝を」

「ありがとう。でも、それは目覚めた時に本人に言ってあげて」

「だな」

「ですわね」

三人の視線が自然とアニスの寝顔に集中する。

今、急に目覚めたら、彼女はと思うだろうか——そんな事をふと、ロゼットは思った。

『和』

一言でこの空間を表すなら、その一語に尽きる。

床には畳が敷かれ、壁は障子で仕切られ、照明は行灯によって柔らかな暖かさを感じさせる、完璧な和室だ。

やみひめはすでに、この場に何度か訪れた事がある。

機獣である〈ヤミヒメ〉の中の仮想空間——〈想刻の間〉。

初めては〈機獣少女〉になると決めた時だ。契約のために呼ばれ、当時はまだMBデバイスの〈カグツチ〉としか認識していなかった。

やがて〈カグツチ〉は本来の記憶と名前を取り戻し、並行世界の自分であるやみひめの中に溶けて消えたが、惑星ゼヘナに転移した事で思わぬ再会を果たす事となったのだ。

「……ええと、つまり、この人が——？」

和装の女性の胸に抱かれながら頭を撫でられ、珍しく——つい先ほどもあったが——戸惑っているツバキに、やみひめが苦笑を浮かべて答える。

「そう、〈カグツチ〉。あのオオカミ型の機獣が本体なんだよ」

紅桜の指示に従い、やみひめはツバキをお姫様抱っこしたまま〈ヤミヒメ〉のコアが収められた空間——コア・ルームに入った。直後、気付けばこの仮想空間である〈想刻の間〉にいたのだった。

其処で二人を出迎えたのが、この空間の主であり、ツバキを今まさに可愛がり中の女性である。

「ねえ、もうそのくらいで……」

「ようやく念願が叶ったのだ、よいではないか。案ずるな、此処は現実とは時間の流れが違っ」

ツバキも連れてこいというのは、このためだったらしい。

確かにツバキのMBデバイスとしての〈カグツチ〉は相棒というか、むしろ保護者のように彼女を気にかけていたが、こんな願望があったとは……。

「ただでさえ地球での一件以来なのだ。堪能させるがよい」

「え？ どういう意味ですか？」

「それは……」

〈カタストロフ〉との戦いが終わり、やみひめは自分の判断で、〈カグツチ〉を〈ヤミヒメ〉とは別の疑似人格として再起動させた。ツバキには〈カグツチ〉の存在が必要だと感じて。

だが、アヤカによって起動された事で〈ヤミヒメ〉本来の人格が復活し、疑似人格は消滅。そのために同一存在が同じ世界に同時に存在する矛盾が生まれ、やみひめの魂と呼べるものは消失しかけた。

「あの機獣……えっと、〈カグツチ〉の本体なんですよ？ 何度か『やみひめ』と呼ばれていて不思議に思っていましたけど、そういう事だったんですね」

「信じてくれるの？」

〈カグツチ〉の本当の名前は〈ヤミヒメ〉で、並行世界の自分だ——そんなファンタジ的な発言、普通は信じないだろう。

「はい。なぜか、まったく疑う気になれないというか、そうなんだって思えてしまうんです」

そう言っただけでツバキが苦笑を浮かべた。

「けど、こうしてやみひめさんは〈ルイン〉から解放されています。また矛盾によってどうにかなったりは……」

「それは……どうなんだろう？」

ツバキに指摘されるまで気付かなかった。機獣の〈ヤミヒメ〉に匿かくまわれる事で、世界から存在を誤魔化していたような状態だったが、今はこうして完全に独立して存在している。また排除されるような事態になるのではないかというツバキの疑問はもつともだ。

「問題ない。この『紅い世界』が続いているうちにはな」

「どういう事？」

そんな事かといった様子たずのヤミヒメに訊ねる。

「今この一帯は其方の領域だ。物理法則はおろか、法も理も、何者であろうとその存在を侵す事など出来ぬ」

「この現象って、そういう事だったんだ……」

〈ルイン〉の外に出た時には、世界に紅いフィルターがかかったような状態だった。つまり地球でもあった件の現象は、やみひめが無意識下で起こしたという事なのだろうか。

「それはそうと——そろそろ放してもらえませんか？」

さすがに限界だと感じたのか、ツバキが控えめに言った。

「むう……致し方あるまじ」

まだ満足していなかったのか、不承不承といった様子パートナーの仮想人格の方のヤミヒメから解放され、ツバキが人心地つく。相手が勝手知ったる相棒でも、姿が違えば戸惑うのは仕方ない。

「……本当に〈カグツチ〉なんですね。そういうえば、声も言葉遣いも、そのままです。――」

「あ、でも本当の名前はやみひめさんと同じなんですよね」

「構わん。私はこれからも〈カグツチ〉だ。其方そなたと共に在る限りな」

凛りんとした表情で力強く明言するヤミヒメ。並行世界の同一存在とはいえ、やはり自分とは違う、別の存在なのだ。やみひめはそれを改めて感じた。

「……はい。今までありがとう。これからも、よろしくお願ひしますね——〈カグツチ〉」

「心得た。其方がそう呼ぶ限り、我々は一緒だ——ツバキ」

微笑ほほえみ合う様子を見て、やみひめは二人を逢あわせて良かったと感じた。ツバキを取られたような気もしないではないが、ある意味で相手は自分でもあるので、複雑な気分だ。

「それで、これからどうするんですか？」

さすがと言うべきか、ツバキは気持ちの切り替えが早い。先の『時間の流れが違う』という発言は聞いていても、そののんびりもしていられないだろう。

「そっか。ツバキはあの時、気を失ったから知らないんだよね」

「……？」

ツバキの小首を傾かしげる仕草が小動物のようで、やみひめも少し抱きしめたい衝動に駆られた。



## あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第四十五話をお届け致します。

先月に引き続き、今月の執筆も地獄でした。1ページ書くのに数時間かかりました。書く事は決まっているのに、上手く出力出来ない。主に集中力の問題かもしれない。なんとかならないものか……。

良きところで謝辞を。

まずはいつもの紙白さんに感謝を。今回登場したクラウの新フォームは、メガミデバイスのクラウが元ネタです。このために設定も用意していただきました。ちなみに名前は紙白さん命名の〈ラインハイト・ライセン〉です！ 意味は秘密だそうです、なんたる焦らしプレイ……興奮する！

今回はベアトリーチェの戦闘シーンがあるので、元ネタ〈トール・アルコン〉の生みの親であるenigma64さんにも久々にチェックをお願いしました。ようやく出せましたね、モード・サルヴァ……感無量。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。アンケート、マジでお願いします。コメントなしで大丈夫なので。

さて、あと二回で終わるのか？

そして、なんか今回のサブタイトルが詐欺っぽくてすみません。

2020 / 10 / 31 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る